

毎日あった敵機の空爆が全くなくピタリと止んだので、だんだん納得したのである。

以後は毎日毎日後方に下がる。昭和二十年十月一日、中支威寧に到着。昭和二十一年四月九日威寧を出発し、武漢を経て武昌に到着、武昌より乗船、南京に向かう。四月二十日付にて陸軍兵長に進級した。

昭和二十一年四月二十三日、南京上陸、鉄道にて二十五日上海に到着。その後は毎日市街地区にてキャンプ生活が続いた。六月二日上海出帆、一路日本に向かい、六月四日佐世保に上陸。明五日、佐世保海兵団内にて復員式を終了し、約五年振りに懐かしい我が家に無事復員した。

中支戦線の思い出

山口県 岡崎 哲夫

私は昭和十八年二月一日、山口市の歩兵第四十二連隊補充隊へ、現役徴集兵として入営しました。

私の入営当時の家族構成は

祖父	死去
祖母	健在 農業
父	健在 農業
母	健在 農業
本人(長男)	健在 農業兼電気工事夫
弟(次男)	健在 農業
弟(三男)	健在 学生
妹(長女)	健在 郵便局勤務
妹(二女)	健在 学生
妹(三女)	健在 学生
妹(四女)	健在 学生

という、十人家族の大世帯でした。作付面積が一町二反歩で、生活はやや苦しいといったところでした。

当時の戦局の推移状況は昭和十六年十二月八日の開戦当初よりの勝ち戦さの継続で、国内の士気は旺盛でした。

入営に際しては一月三十一日、村役場の前で壮行式が開かれ、見送られる壮丁は私一人であったが、私が

予てより青年団その他村内の組織のお世話役をしていた関係で戸数僅か二百八十戸程度の寒村とはいえ、見送人は三百人以上の盛会でした。

私は心中深く期するところ固く、壮行式の答辞では「誓って鬼畜米英の撃滅に皆様の御期待にこたえるよう、粉骨碎身のご奉公をやりとげます。長州を代表して私共が出征する以上、弟や妹が後に続いて戦線に出なければならぬことの無いように、私共で食い止めるよう決死の覚悟で頑張ります」と述べて勇躍兵役に服さんと誓ったことを思い出します。片田舎の村から山口市まで、軽便鉄道、山陽線、山口線と乗り継いで、夕刻父と山口市内の宿屋に共に枕を並べて一泊しました。

軍隊生活の様子については、入営前よりいろいろと多くの人から聞かされて、概ね承知しており、内務班の苦勞、教練演習の苛烈、上級者や古兵とのかわり合い等は、若い勢いと自分から買って出る苦勞により、比較的順調に、暴虐的な扱いに苦しんだことはない記憶しております。

入営後間もなく班長に呼ばれ、「下士候志願をせよ」と勧められました。が、「私は長男でありますから、兵役は厭いませぬが、下士候は致しません」と断りました。それでも三回もしつこく勧められるので、「班長、下士候はやりませんが、兵として日本一の兵になります」といって中隊の誰にも負けぬよう努力をした。また目標は幹部候補生において、彼等以上の成績を得るようにも心を砕きました。

さて、いよいよ野戦へ出陣である。入営後二週間の二月十四日、第七〇師団独立歩兵第一二三大隊（槍第七一五四部隊）転属要員として下関より出港、釜山、鮮満国境、山海関（二月十七日）、浦口、南京、上海、寧波、餘姚へと長駆して、列車、船舶、舟艇を乗り継ぎ、第二中隊（田上隊）へ編入されて、初年兵としての訓練も進められて、八月一日一等兵になりました。

この間寧波で班編成があり、私は軽機関銃班へ編入された。任地の餘姚に着いたのは二月末の頃と思う。

昭和十八年四月三十日、第二中隊では毛頭院軍曹外の合同慰霊祭が行われた。その時周港（第一中隊駐

屯)において「田岫山」反乱の第一報が入る。これは予てより周港において、日本軍に協力中の支那軍と、我が第一中隊長以下の幹部が何らかのお別れパーティーをして、日本軍が酒席で騙し討ちに遭い、中隊の将校下士官のほとんどが死亡し、残るは初年兵教官の松井小尉唯一人との悲報である。

「さあ、大変だ。入隊わずか二か月でもう実戦の第一線」と思えば否応なしに心も引き締まる。おのれ「田の奴め」と憤怒がわく。

それから三か月、五月、六月、七月と江南の雨に打たれ、炎熱にさらされ、体温と汗と日光で軍服のクリーニングを繰り返しつつの討伐行であった。

播鉢山付近の作戦で、索敵行軍中の機関銃分隊の兵が敵弾に倒れた。直ちに散開、戦闘開始である。分隊長は島本兵長、自分は軽機の射手として位置につく。

さすがに初年兵の初めての初陣であるが、歩兵操典に示す通りである。軽機が射れば小銃が進み、小銃が射れば軽機が出る。敵は逃げる。射撃命令は出ない。だから弾丸は射たずに土饅頭を盾に前へ前へと出る。あ

たかも先陣争いである。最後は突撃と思ったが、三八式歩兵銃ならお手のものだが、九六式軽機で果たして突撃出来るだろうかと不安が頭を横切る。ちなみに我が分隊は初年兵ばかりである。

そんなことで我が分隊は他の分隊よりも随分と前へ出たようだ。とたんに後方からパンパンと重機関銃の発射音とヒューヒューヒューと頭の上を弾丸の音、土饅頭をこする。友軍の重機は百発百中と教えられていた。その一番恐ろしい重機の攻撃である。しかも前門の狼後門の虎である。我が分隊の余りにも前進しすぎたのと、戦友を殺された混乱か。

土饅頭のかげで敵に背を向けながら、鉄帽の中から寄せ書きの日の丸。早速役に立った。分隊長が銃に結んで打ち振ると射撃は止んだ。こんな恐いことはなかった。

丁度その時、右手の山すそを一人の支那服の男がかむようにして走った。今度は重機がそれを狙う。しかし男は丘の向こうへ消えた。数十分して男が帰って来た。その男は中隊で使っていた「トンビョウ」と言

うニーコーだった。かぶっていた帽子のテッペンを弾丸が射ち抜いていた。髪もちぎれていた。もう五センチ下なら頭は木端微塵。人間の運をつくづく感じさせられた。三か月の討伐戦も、とうとう田岫山に逃げられて戦いすんで日は暮れた。討伐から帰ってすぐに第一期の検閲。続いて二期の検閲も終わり、一人前の兵としてそれぞれ中隊の勤務について。

ある日、初年兵集合で試験があるという。これは上等兵への進級試験だと一生懸命頑張った。ところが暗号兵の採用試験。ああ何たること。中隊を離れて杭州の師団司令部でまたまた嫌いな暗号教育。お陰で初年兵を二年やった。教育終了、そのまま師団司令部参謀部暗号班に勤務。師団在籍のまま上海の第十三軍司令部参謀部暗号班勤務を命ぜられる。

次に参謀部暗号班の業務とか、その他実務上の体験を話しましょう。得意な業務ですの。

師団司令部にいと、隸下の部隊は歩兵の八個大隊、輜重と砲兵等で十以上になります。それに加えて軍司令部関係、飛行機よりの通信筒利用による連絡、軍大、

伝書鳩等の各方面より情報、暗号の受信、発進に伴う暗号の解説、組立、成文化、書類作成、報告、下達その他これらに関係するいろいろの仕事があります。そして部隊の中で最も早く情報をキャッチする立場にいた。階級は一等兵と低いが責任は師団の死活を制する重大なもの。兵も下士官も将校も皆、助け合い庇い合って協同して処理しました。一般戦闘部隊とは違って行軍中の休憩はない。夜間といえど眠ることもままならぬ。暗号書は一日も早く頭の中に叩き込め。何時暗号書を焼却するか判らぬ。

機密電報、作戦緊急電報等も何時とびこむか分からぬ。入電して一時間半も経過してもまだ上へ届けられぬ状態のこともあり、兵は重営倉、暗号班長（中尉）は禁錮と処罰されたこともありました。

作戦中夜営すると、各人各隊それぞれの部署につきます。自分等暗号班は、第十三軍の通信隊が何処にあるのかと夜の暗い中を、機密的に探し歩いたりして、他の人には知れない苦労もありました。現在の平和な豊かな状態なら選挙の街宣車よろしく、マイクを通し

てポリリュームの上があった声で「司令部は何処か」とやれば一瞬で片がつくのには、時代や場所や条件が異なる、予期せぬさまざまな悲喜哀歓が発生し、五十年以上をすごしてみると感無量。それだからこそ、戦友会で昔の戦場で培われた固い戦友愛に結ばれている。

浙江省の衢州作戦（昭和十九年の夏）参加の司令部直轄の一個大隊が前線へ出動した。

さすがに支那軍はよく知っている。敵は夜間攻撃をかけて来た。数少ない衛兵小隊が力の限りを応戦をしている。自分らも銃をとり弾丸を射ちたい。それは許されぬ。次々と入ってくる暗号を解かねばならぬ。軍人か軍属かと自分の身分について考えたり話したものだ。

温州作戦、麗水作戦と経験し、終戦前には第七十師団は衢州へ移動せよとの命令を受けもした。

軍人としての階級は、昭和二十年四月一日上等兵（原隊を離れて司令部勤務をしていたので、精動章は二本になったが階級は忘れられ、司令部付きのため上等兵進級はおくれた）、八月二十日兵長に進級しまし

た。

従軍中の苦勞と言えば、食糧がない、飲料水がない、マラリヤに冒された等のことで、南方各地の筆舌に尽くせぬ大損害の悲惨な戦場に比べれば、程度は軽いはいえ、それなりに苦しかった。食糧では輜重はいてもなかなか思うように補給が追いつかぬ。出発当時靴下に入れた三日分の米はすぐなくなる。乾パンで誤魔化しながら現地徴発に頼らざるを得ない。隷下の戦闘部隊が先行して既に荒らされているので、司令部が後進しても何もない。うらなりの小さい南瓜一個を三十数名で分けたこともある。やっと見つけた支那の玄米の飯も一口二口しかない。空腹に苦しんだ。

水も苦しんだ。夏の炎熱の行軍で、水筒はいつもほとんど空である。衢州作戦では、そこらの川に比較的清い水が流れていた。それを見て、もう本能的に川の水に顔をつけて思い切って飲む。将校が怒って「プチ斬るぞ」と叱っても止めない。消毒薬もないので生水そのまま。奇妙に幸いにも腹に異常なかった。後から考えてゾッとしたものだ。

そんな状態が続いて体力が弱ると必ずマラリヤが出る。私は最も悪い熱帯熱にやられて、作戦中、正に死線を潜り漸く九死に一生を得た。戦友の言葉につくせぬ愛情の賜物と、今もそれが強烈に記憶に残り、親兄弟に対する以上の、感謝の念で一杯である。戦地で共に苦業を分け合った経験者でない、戦友愛の深さ、戦友会の絆の強さは理解出来ない。

終戦になったが部隊の危険は前にも増して悪化した。九月の中頃のことか、蛙埠に近い大通に、約二千人の在留邦人がいて、共産軍の脅威から救出を必要とした。この救出作戦では予想せぬ数名の死亡という損害を出した。戦死者本人は勿論、遺族の心情を思えば真底やり切れない。戦場は無常である。合掌あるのみ。

九月十二日司令部より原隊の第一二三大隊第二中隊へ転属となり、原隊の全員は温かく迎え入れてくれた。暗号の業務から解放されて、兵隊本来の陣中勤務に服した。

九月の末頃か、支那軍の正規軍に警備をゆずり、私は歩哨を交替し、武装解除を受けた。思いもよらず敵

に降伏して武器を引き渡して丸腰になるとは、悔しきとはまた別に、命あつての物種で、内地へ生きて帰れるとの喜びが心の片隅に湧いてくる。

これ以後、食事は朝夕の一日二回、若いせいかなにもしなくても、腹だけは空いてくる。丁度支那軍の指示による道路の清掃やその他の雑役に出るとパン一個を支給される。パンにつられて雑役に出て空腹のたしにした。

やがて内地帰還に希望と歓呼を胸一杯ふくらませて、昭和二十一年一月末頃のことか、バンブーより列車輪送で上海へ集結した。上海へ来て待機約一か月目に、不幸にも伝染病（腸チフス）が発生し、さらに約一月遅れて三月七日上海出発、思い出多い支那大陸と不幸にも帰らぬ戦友の御霊につきせぬ別れを惜しみ、三月九日博多上陸、同日現役延期解除隊となり、懐かしの我が家へ帰りました。

上海で乗船待機中の苦しい思い出はまたまた飯のことです。朝食は飯盒一杯を六人で、夕食は粥を六人で分けます。副食とて別になし。次々に栄養失調となり

ます。倉庫の中でベタリと坐ったまま何もすることもなく日を過ごします。それでもシラミだけは遠慮なくわいてくる。お天気のよい日は室外でシラミとりをする。そんな毎日が続く。

本当に日本内地へ帰れるのか

また伝染病が出たりしないか

デマや偽りの情報ばかり入ってくる

一日も早く帰りたい焦りと、不安と、何時になると帰れるのか、こんな毎日ではかなわんと焦り、不安、不平、不満が爆発しそうであるが、現在はまだもうメイファーズ。ひたすら耐え忍ぶのみ。前向きの苦勞でなく、後向きの苦勞である。在支期間中、一番嫌な思いの期間でありました。

復員して家へ帰ると、次の弟が一週間前に南支より無事帰っていて、お互いの無事を一家で喜び合いました。農家とはいえ、三月に帰宅した復員兵二人の飯米はありません。前年の十一月にその年の産米の供出割当てのためです。それでも農家のお陰で麦と野菜で補っておりました。作付面積も働き手二人の出征のた

め一町二反より七く八反に減少していました。

復員二十三歳、結婚二十四歳、一男一女と孫三人に恵まれ、地域関係や職域関係の役員も永らく勤めて感謝され、二十年前に父を、去る九月に母を見送って、今は平和に年齢にふさわしく、落着いて生活しております。

独立歩兵第二十三大隊を永久に記念して「中支派遣血風戦友録」を第一号より第五号のシリーズ物として、今なお若い血をたぎらせ、戦友相寄り大いに談じ、相喜び相励ましております。

昔の夢を想い、亡き戦友の冥福を念じて、これからも元気で頑張ります。

思い出の軍隊生活

新潟県 長谷川 賢次郎

私達親子三人は東京の淀橋区(現新宿区)戸塚二丁目、早稲田大学の近くで生活していたが、昭和十七年